



新年の御挨拶

社団法人 日本測量協会

関西支部長 宮 井 宏

新年あけましておめでとうございます。

昨年はあまりいいニュースに恵まれず、これらの日本はどうなることやらと心配していたところに、鈴木章北大名誉教授と根岸英一米パデュー大特別教授がノーベル化学賞を受賞されとのニュースが飛び込んできて、ようやく救われたような気持ちがしました。そのときのある新聞の社説には「ノーベル賞には国民を勇気づける力がある。」とありましたが、全くその通りだと思います。

鈴木名誉教授と根岸特別教授のお二人は、報道機関とのインタビューで、ノーベル賞受賞のよろこびを率直に語っておられましたが、またその一方で、今の若者層に蔓延しつつある「理系離れ」に対する危機感と資源小国日本を支える科学者、技術者、政治家などにも見られる「内向き志向」の打破についても触れながら、日本国民各層に対してより一層の奮起を促しておられました。

私は、こうしたお二人の一見穏やかな談話の中に、今の日本の風潮に対する極めて的確な分析と痛烈な批判ならびにその処方箋までもが示されているように思い、ほとほと感じ入った次第であります。そこで今日はそれらの記事の中からお二人の「語録」を抜き出し、支部会員の皆様への新年のはなむけの言葉とさせていただきたいと思います。

根岸特別教授は「日本の若者の理系離れ、科学技術離れには危機感を抱いています。最近、日本からの優秀な留学生をパデュー大でみかけることがめっきり少なくなりました。日本はすごく居心地のいい社会なのでしょうけれど、若者よ、海外に出よ、と言いたい。たとえ海外で成功しなくとも、一定期間、日本を外側から見るという体験は

何にもまして重要なはず。」と内向き志向の打破と海外武者修業の重要性を強調しておられます。

鈴木名誉教授も「日本は資源も何もないところで、人間の頭しかない。だから日本は付加価値の高い新しい製品を作って他国に買ってもらうなければ生きていけず、科学や技術は欠かせない重要な地位にある。もう少し若い人が理系に興味を持ってもらうことが大事ではないか。」と最近の日本の若者の理系離れに警鐘を発しておられます。共に傾聴すべき御意見だと思います。

また鈴木名誉教授は、科学や技術と政府・政治家の関係について「日本の科学技術力は非常にレベルが高く、今後も維持していかなければならない。科学や技術の研究にはお金がかかる。研究者自身の努力や知識も大切だが、必要なお金は政府がアレンジしなければならない。スーパーコンピューターなどの分野では絶対に必要だ。研究は1番ではないといけない。『2位ではどうか』などというのは愚問。このようなことを言う人は科学や技術を全く知らない人だ。科学や技術を阻害するような要因を政治家が作るのは絶対にだめで、日本の首を絞めることになる。1番になろうとしてもなかなかできないということを、政治家の人たちも理解してほしい。」と指摘しています。

最後に、この御挨拶の冒頭で「ノーベル賞には国民を勇気づける力がある」という社説の言葉を紹介しましたが、今私はこれに加えて「ノーベル賞受賞者の言葉には科学者、技術者を勇気づける力がある」と言いたいと思っています。

(文中の引用は全て『産経新聞』からの引用であることをお断りしますとともに、産経新聞社に対し厚くお礼申し上げます。)